

資料 17

内分泌攪乱化学物質問題に関する日英共同研究

平成 11 年 3 月に開催された G8 環境大臣会合の際、当時の真鍋環境庁長官と英国ミーチャー環境大臣との会談において、先進的な研究実績を有する両国間で内分泌攪乱化学物質について共同研究を実施することが合意され、同年 12 月には日英共同研究の実施取り決めが締結され、技術的情報の自由な交換、研究上の知見を共有し、共同研究を発展させる、合同シンポジウム等学術的討議の開催、両当事者による専門家の交換 について日英間で内分泌攪乱化学物質共同研究を推進することとなった。

1. これまでの取り組み

1) 平成 11 年度

神戸にて第 1 回ワークショップ（平成 11 年 12 月）

2) 平成 12 年度

海洋生物と淡水生物の異常に関する研究の比較分析

魚ピテロジェニン抗体のクロスチェック

無脊椎動物を用いた内分泌攪乱作用評価法の開発

メダカ関連の基礎情報収集ホームページの作成

渡英研究者：藤田敏明・深田陽介（北海道大学）、高橋徹（熊本県立大学）

英国プリマスにて第 2 回ワークショップ（平成 13 年 1 月）

3) 平成 13 年度

海洋生物と淡水生物の異常に関する研究の比較分析

魚の性分化に関する分子生物学的アプローチ

甲殻類における内分泌攪乱作用の現状とその作用メカニズムの解明

無脊椎動物を用いた内分泌攪乱作用評価法の開発

魚類等の実験用餌の標準化

開発途上国における海棲生物の内分泌攪乱現状調査

渡英研究者：長江真樹・征矢野清（長崎大学）、甲斐利典（熊本県立大学）、
岩田久人（愛媛大学）

つくばにて第 3 回ワークショップ（平成 13 年 12 月）

4) 平成14年度

トゲウオを用いた内分泌攪乱評価手法の開発

無脊椎動物群を用い、環境試料(大気、水、底質や土壌)中に存在する環境化学物質による内分泌攪乱作用を中心とした新しい環境リスク評価

メダカ、カレイなど魚類における分子生物学的アッセイ法の開発

内分泌攪乱試験用動物の飼育条件等の標準化

ボラを用いた内分泌攪乱化学物質のフィールド調査による影響評価

渡英研究者：長江真樹・征矢野清(長崎大学)、北野健(熊本大学)、高瀬稔(広島大学)

英国ヨークにて第4回ワークショップ(平成15年4月)

5) 平成15年度

トゲウオを用いた内分泌攪乱評価手法の開発

内分泌攪乱化学物質のフィールド調査による影響評価ツールの作成

水環境における人畜由来エストロゲン物質の寄与率に関する研究

新規の内分泌攪乱作用に関する試験法開発

渡英研究者：長江真樹(長崎大学)、勝 義直(岡崎国立共同研究機構)

岡安祐司(土木研究所)

熊本にて第5回ワークショップ(平成16年2月)

2. 今後の取り組み方針

これまでの5年間の成果についてのとりまとめを行ったうえで、平成16年度からは新たな枠組みで日英共同研究を推進する。